



●複数の指標

伝統民家の改修コンセプトをつくり推進する

1. 立地環境を見る
 

自然度、敷地条件、隣棟間隔、日射、方位、熱環境など住まいと自然力の利用に伴うエコ効果の評価とパッシブな改修手法に視点を置く。
2. 適正なライフスタイルを見出す
 

住まいの基本である間取りと生活スタイルとの調和力を高めるための空間の分節と生活機能の配分・配置を組みあげる。
3. 伝統技法を観察する
 

対象となる伝統民家のもつ独自の特殊要素と経年による変化や弱点を比較し、調査資料や実測を通じて、建物の健全な再生、改修手法を立てる。
4. 費用対効果を検証する
 

前提となる工事予算に対して、必要な床面積、品質の確保、適正な工事規模、快適な自然素材、美の獲得などコストコントロールとデザイン、性能を融合させる。

●コンセプトワークの位置づけ

「コンセプトワーク」とはリフォームの推進の初期段階において「計画力」を注ぎこむことある。それは「エコ効果」や「技法効果」等の複数の指標を総合化する役割を担う作業である。

通常、「リフォーム事業」はハードウェアの領域とみなされている。われわれはソフトとハードの領域間のフィードバックが必要と考える。特に伝統民家の改修は、ソフトが欠落した状態のままハード志向に偏り、その結果「標準以上の品質」には至らないのが現実である。また多くの改造例からも、不適正な建材や工事が行われてきたことも否定できない。様々な背景はあると思われるが、改造、改修された古民家の実態を見る限り、担い手の側にもその責任の一端があるだろう。

また、コストについての施主側と担い手側の意識差もある。所有者が求める改修に対する想いは多様であるものの、単なる低コスト仕様よりむしろ費用対効果を求める場合や時代的価値観の多様化も無視できない。それに対して請負側が価格競争による低コスト提案を優先する意識や価値基準の相違も関係していると思われる。

現実のリフォームの現場では「コンセプト」の必要性について関心が低く、無頓着である。その結果改修後の快適さが十分に確保できず、古民家が見捨てられ大きな住宅資産を失うことになる。この現実には所有者とリフォームの担い手双方にとっての損失の構造であると考えられる。

●複数の指標

コンセプトをつくるためには、いくつかの要となる指標を想定する必要がある。ここにあげた指標をその目安にしていきたい。指標は見方によっては、思わぬ手掛かりとなって伝統民家の価値を置き換えることも可能である。

コンセプトワークは、全体の工程から見ると、調査時期と具体的な設計までの期間に位置付けられる。一般的には設計業務の中の計画期間として認識されている。この間に所有者の要望や諸課題を総合的に解釈し、方針を設定する。

なお、コンセプトワークの担い手は、以降の設計・デザインを担当する者あるいは特種解を施主が要望する場合は、異なる分野の専門家の協力もある。ここでは設計者が兼務すること前提としている。

